

# 『LOVERS』

作・佐野和敏

## 【登場人物】

神 様 (かみさま)

田代健太 (たしろけんた)

美樹 (みき)

奥村佳介 (おくむらいすけ)

裕美 (ひろみ)

中嶋順次 (なかじまじゅんじ)

高橋真琴 (たかはしまこと)

☆天界。

霞の中にもいるような何も見えない場所である。

その霞が薄っすらと晴れていくと、人が立っている。

後ろ姿で顔は見えないが、なにか威厳のようなものを感じる……神様である。

その前にひざまずいて頭を垂れている一組の男女。

天使の田代健太・美樹である。

神様 「どうだ、決まったか？」

健太 「はい」

神様 「では、どうする？」

美樹 「私達は今のままで十分満足です」

神様 「という事は、生まれ変わらない。という事だな？」

健太・美樹 「はい」

神様 「そうか……」

健太 「私達は、どこにいてもいつも一緒。ですから、ここで十分幸せです。（美樹に）な  
っ」

美樹 「うん。もし、生まれ変わってしまったら、必ずまた一緒になれるという保証はな

「いんですよね？」

神様 「ない。しかし、お互いが出会いたいと望むのであれば、必ず出会えるであろう……」

健太 「でも……ここでの記憶はなくなると……」

神様 「確かになくなる。だから出会える保証もなければ、出会えたとしても一緒になれるかどうかさえも分からない」

健太 「じゃあ、生まれ変わったあとの運命を見てから決めるってのはどうよ？」

神様 「それはダメだ。そんなことをしたら、君らのためにならない」

美樹 「それなら尚更このままで結構です。ここなら、五〇年たっても歳も取らずに生きていた時のままでいることが出来ます」

健太 「そう！いまでも五〇年前の、若々しい、あの頃のまんまの姿をずっと見てられるので、こんな嬉しい事はありませんよ。（美樹に）なっ」

美樹 「もちろん。私の美貌は永遠なのです」

健太 「（神様に）歳取らないんですよ、ここ！それに……（内緒話で）自分で言うのもなんなんです……ここでは浮気したくても出来ませんし……」

美樹 「（聞こえてる）あら！？じゃあ、生きていたら浮気してたって事？」

神様 「（たしなめる）これっ！」

美樹 「だって、健太が浮気なんていうから」

神様 「まったく、不謹慎なことを言うものではない」

美樹 「そうよ」  
健太 「ごめん。つい、口が滑って……」  
美樹 「滑った!?」

神様が美樹を落ちつかせようとする。

神様 「まあまあ……」  
美樹 「だってえ!」  
神様 「君もきちんと言葉を選びなさい」  
健太 「すいません。つい、ポロっと、本音が……」  
神様 「あ!」  
美樹 「本音!?ポロ!?したいの!?浮気!?!」  
健太 「え!?いや!そういうことじゃなくて……」  
美樹 「!したいの!?!」  
健太 「したくない!したくないっス……(きちんと説明しようと)そうじゃなくて……生きていても、もちろん、いつまでも末長く美樹を愛しつづけてたはずだよ」  
神様 「あっ!また!」  
美樹 「はずって、何よ!」

健太 「え！あゝいや！あの……愛し続けてたよ」

美樹 「続けてた！ってなによ！？愛し続けてるでしょ！」

健太 「そう！いつまでも、そして今でも、美樹を愛し続けてるよ！」

ホツとしたように何度もうなづいている神様。

神様 「そうそう、それでよろしい」

美樹 「ついでに言うかね、美樹だけをしってもらえる！」

神様 「(また始まったというような呆れ顔) あゝ……あのね、君もこんだけ旦那さんが言  
つてくれてるんだから、もう良いんじゃないかな……」

美樹 「もう良いんじゃないかって！あなたは神様だから分からないんです。私たちは  
海よりも深く、空よりも広い心で愛し合ってるんです。今でも！そう、(遠くを見  
つめるように) そしていつまでも恋人達のように！特に私は！」

肩身の狭い神様。

神様 「……はい」

美樹 「(健太に) で！？だけ！でしょ！」

健太 「そうだよ……（自信を持って）美樹だけ、を愛し続けてたよ！」

神様 「あっ！バカ！また！」

美樹 「バカ！？って、こう見えても私の大事なダーリンを捕まえて、バカとは何ですか  
バカとは。いくら神様でも聞き捨てなりません！謝ってください！」

神様 「いや、だって、また同じ間違いをするから……」

美樹 「だからって、バカはないでしょ、バカは。いいですか、誰にでも間違いというものはあるんです」

健太 「美樹、別にそこまで言わなくても……相手は神様だしさ……」

美樹 「あら！神様なら何を言ってもいいの？」

健太 「いや、そういうことじゃないだろうけど……」

美樹 「そうでしょ！いけないことは、神様であろうと誰であろうといけないんです。チビツ子の時に習ったでしょ！」

健太 「はい……」

美樹 「よろしい。では神様、改めて、謝ってくださいますね？」

神様 「はい……すいませんでした」

美樹 「よろしい！ちなみに、健太君、『愛し続けてた』って事は、今はもう冷めてるわけ？」

神様 「（健太に）ほらあ……」

健太 「何言ってるのよ！今でも愛し続けてるに決まってるじゃない！進行形よ、進行形！

美樹  
ing（アイエヌジー）よ、ing（アイエヌジー）！  
「嬉しい）そうでしょう！それを言ってほしいのよお、あたしはあ……（ご機嫌  
で神様に）ねえ！」

美樹の言葉を聞いていない神様。

神様  
「（独り言）ん？……アイ・エヌ・ジー……ってことは、愛・NG！……なんちゃ  
って……」

と、ひとり、クスクス笑っている神様を、仲直りした健太と美樹が冷たい視線で見  
ている。

健太・美樹「（咳払い）ん、んん！！」

気がつく神様。

神様  
「（ばつが悪い）あッ……ハハハ……え、あ……（威厳を出す、緊張感がない）  
ん！あ、では、生まれ変わらないという事ですな！」

呆れて返事する健太・美樹。

健太・美樹「……（やる気のない返事）は、い」

神様「なんですか、その気のない返事は！きちんと返事をしなさい」

健太・美樹「はい、生まれ変わりません！」

神様「わかりました！（間）では、新たな天使を呼び出さなければならぬ。それを、君らにやってみよう！」

美樹「え！？何で私達がそんなことやるんですか？」

神様「それは（うろたえるが冷静を装い）……（威厳を出す）君らが、神を冒涇したから、その罰です」

健太「罰！？」

神様「そう！」

美樹「冒涇！？」

神様「（十字を切り、祈るように）イエス、」

美樹「（思わず吹き出す）」

健太「なんじゃ、それ！！（ブツブツと）神様がイエスかよ！（美樹に）なあ！」

美樹「うん！（神様のマネをして）……イエス！」

神様「君らのそういう態度が冒涇にあたるのじゃよ！（ごまかす様に）わたしは別にシ

「ヤレのつもりで言ったのではない」

美樹 「そんな冒険って言いますけど、私たちは別に……神様が私たちのチワ喧嘩に首突っ込んできただけじゃないですか……」

神様 「あそう、嫌なら君らに生まれ変わってもらおうから」

健太 「そんな……」

神様 「（威厳出す）どうかな？もう一度生まれ変わってみては？もし本当に二人の愛が強ければ、必ずもう一度出会うことができる。そして一緒になることも出来ると思うが」

健太・美樹 「……」

神様 「どうだ？生まれ変わってみる気になったかね？」

美樹 「わたしたちの運命はあの日、あそこで終わったんです」

健太 「人の運命は生まれた時から決まっている。私達が出会えたのも、結婚できたのも、全て運命によって決まっていたからなんです」

美樹 「あの日……あんなったのも……あんなる運命だったんです。五〇年前の……」

美樹・健太 「あの日のも……」

霞が出てきて、辺りがだんだん見えなくなっていく。

☆五〇年前。教会、表。

結婚式の賛美歌が厳かに流れている。

大きくて悠然としている建物。

大きな鐘が釣ってある。

教会の扉が重々しく開く。

アロハシヤツ姿の奥村佳介、裕美、中嶋順次、高橋真琴が出てくる。

裕美と真琴がフラワーシャワーのカゴを持っている。

順次

「ふう、やっと歌が終わったぜ。どうもあの賛美歌っていうのは、俺の性に合わないね……（佳介に）なあ！」

ひとりボソボソと賛美歌『妹背をちぎる』を練習している佳介。

佳介 「（歌っている）」

真琴 「（佳介が歌っているのに気にせず）美樹、綺麗だったわねえ……」

順次 「でもさ、泣き過ぎじゃない。グツチョ、グチョになってたよ」

裕美 「感動してるのよ」

順次 「そりゃ、分かるけどよ。何も健太まで一緒になって泣かなくても……」

裕美 「いまふうの『授かり婚』っていうやつで、式挙げてなかったんだから仕方ないわよ。あんただってそうなれば分かるわよ」

真琴 「あら、滞りなく式挙げた人の言葉とは思えないわね」

裕美 「あたしは違う意味で苦労してるのよ。あの調子だから……（と、佳介を指す）」

脳天気な賛美歌の練習に没頭してる佳介。  
そんな姿を見て、妙に納得する、順次、真琴。

佳介 「……♪アーメン♪！」

順次 「アーメンはいいから！もう終わったよ！いつまで歌ってんだよ」

佳介 「いや、ここんところがね……なんか上手くいかなくてさ……（歌う）」

裕美 「……あのねダーリン、賛美歌はもう終了。次はフラワーシャワー！」

佳介 「……フラワーシャワー？何それ？」

順次 「お前はなんにも知らないな」

佳介 「お前は知ってるの？」

順次 「当たり前だろ！一昨日、お前たちの結婚式でやってやったる！米の変わりに花撒くヤツ」

佳介 「ああ、あれ。あれフラワーシャワーって言うの？」

裕美 「あの時、説明したでしょ」

佳介 「（順次に）で、どんな意味があんの？」

順次 「意味！？まったくお前はそんなことも知らないで、よく結婚式挙げられたもんだなあ。（大きな溜息）はあゝあ……裕美！説明してやれ！」

裕美 「あたし?!」

順次 「当たり前だろ……一昨日、式挙げたばかりの新婚なんだから」

裕美 「それとこれと、どういう関係があるのよ？」

順次 「いいかあ！もうすでに夫婦の助け合いってのは始まってんのよ」

裕美 「だから？」

順次 「だから！お前が伴侶として説明してやるのが筋ってもんだろ！そこに、夫婦愛という名の『絆』が生まれるんだよ！なあ、旦那よ！」

真琴 「夫婦愛って……独身に言われても説得力ないわよね？」

順次 「真琴だって独身だろ！」

真琴 「そうよ！だからわたしはそんなこと言っていないし」

佳介 「確かに！」

順次 「バカ！俺は独身でも、大人だから、そういう『夫婦の愛情とはなんぞや』というよ  
うな事がわかるんだよ」

真琴 「大人って、あんたは留年したから、私達と同級生になったんでしょ」

裕美

「そうよ。大学辞めて、実家の食堂、継いだほうが良かったんじゃないの？」

順次

「いいの！俺は、インテリの食堂を目指してたんだから。その為に、みんなより沢山の時間を費やして勉強にいそしんで来たわけですよ。そして人間的にも君らよりひと廻りもふた廻りも大きく成長したわけですよ」

裕美

「だったら、その大きく成長した人間として、あんたがきちんと説明してあげれば良いじゃない。ほんとは知らないんじゃないの!？」

順次

「なに言っちゃってんのよ。いいんだよ、俺は知ってたんだから。いいか、夫婦というのは……さっき神父さんも言ってたろ。(外人ぽい訛りを入れて) あゝ、死が二人を分かつまでエゝ、あ、やめる時も……」

裕美

「似てねえゝゝ」

順次

「……お前の旦那だろ！」

裕美

「そうよ！」

佳介

「別に誰が説明してくれても良いんじゃないの……」

あきれ返って真琴が説明する。

真琴

「もう！あのねえ、元々はライスシャワーっていうの。繁栄と豊穰を願って、列席者が新郎新婦にお米を撒いて祝福することなのよ。お米を撒くのは、実を沢山つける稲穂にあやかかって、二人が食べ物に困らないように豊かに暮らせませすように、

子宝に恵まれますように。っていう願いが込められているものなの。でも、最近  
は本物のお米を撒くのは食べ物や粗末にしてるといふか、勿体無いといふか、撒  
いたあとの掃除が大変というようなことだから、その代わりに花を撒くようになっ  
てるのよ。そのほうが、お米より華やかで綺麗だからね。お花の中にお米を混ぜ  
て撒くこともあるらしいけど。だから、私達がそういう願い込めて健太と美樹に  
お花を撒いてあげるの。分かった!？」

順次・裕美・佳介「はい」

真琴「え〜！なに!？（順次と裕美を指して）あんた達まで!まったく」

理由を知らなかった罰の悪さをごまかす順次、裕美。

順次・裕美「申し訳ない……」

お互い顔を見合い照れ合う順次と裕美。

佳介「……ねえ、でもさ、意外とあっさり終わっちゃうね」

真琴「そりゃそうでしょ。一昨日、急に申し込んだんだから。形式だけの簡単なヤツで  
良いつてことで」

順次「お前たちの結婚式で刺激されたんじゃないの？」

真琴 「テロで警戒中って時に、結婚式でもないだろうに……」

佳介・裕美 「すいません……」

真琴 「ああ、そういう意味じゃなくて……こんなテロの時期じゃなくて、あとでもゆつくりできるのにつて、そういう意味よ」

佳介・裕美 「すいません……」

真琴 「ああ！あの……」

順次 「墓穴掘るだけだから、余計なこと言わないほうがいいと思いますけど」

真琴 「はい……」

順次 「真琴だって悪気はないって……言葉のアヤってやつだよ。（真琴に）なあ！」

真琴 「そうよ、そうなのよ！あんたたちは前もって予約してたのに、たまたまテロの警戒中になっちゃったただけなんだから……仕方ないわよ。別に変な意味で言ったんじゃないからね」

裕美 「大丈夫よ！分かってるって！（佳介に）ねっ」

佳介 「うん」

真琴 「良かったあ！変な風に誤解されたらどうしようかと思ったよ」

佳介 「テロって言っても、ここはハワイなんだし、大丈夫なんじゃないの」

裕美 「そうよね！ハワイでテロなんて聞かないもんね」

順次 「まっ、健太たちも、こういう機会でもないし、なかなかハワイで結婚式なんて挙げられないわけだから、ちようどいいっちゃあ、ちようど良かったんじゃないの。」

こんな時期だから少し式代は安くしてくれたしな……いつもは子供もいるわけだしさ」

真琴 「チビっ子は置いてきて正解だったわね」

順次 「いくらなんでも、まだちっちゃ過ぎて連れて来れないだろ」

真琴 「実家に頼んできたみたいよ」

順次 「預かってもらえて良かったじゃんな」

真琴 「おじいちゃん、おばあちゃんは毎日孫といれて楽しいんじゃないの」

裕美 「……あんなたちには感謝してるわ」

真琴 「何よ急に？……気持ち悪いわね」

裕美 「(佳介に) ね！」

佳介 「うん」

順次 「なんだよ？」

佳介 「いくら前もって予約してあったとはいえ、俺たちの結婚式のために、こんな時期

にわざわざこんなとこまで来てくれて……」

順次 「何言ってるんだよ！（真琴に）なあ！」

真琴 「そうよ！水臭いわね！来たくなかったら断ったから大丈夫よ。来たかったんだか

ら」

順次 「そういうこと！……それに、ほら旅費も安くなったし……俺、ワイハーに来たこ

となかったし」

真琴 「ワ、イ、ハ、ー……ってなに？古っ！！」  
順次 「うるせえ！俺はこいつらの門出を祝ってやりたいなあ〜と思ってだな……」  
佳介 「ありがとう」  
順次 「もう！そんな改まんなって！」

教会の鐘が鳴る。

真琴 「ねえ！そろそろ出てくるんじゃない」  
佳介 「（賛美歌の紙を見ながら）ほんと？じゃあ、練習しなきゃ」

順次、裕美、真琴が冷ややかな眼で佳介を見ている。

順次 「（真琴に）おい、今さっき潮らしく、ありがとうって言った男だよな？」  
真琴 「多分……」  
順次 「（裕美に）おい、あんなすっ呆けた男が、お前の旦那なんだよな？」  
裕美 「多分！……」  
順次 「（真琴と裕美に）おい、俺はあんなのと友達なんだよな？」  
真琴・裕美 「多分！……」

3人とも大きいため息をつく。  
「はあく！！」

その視線に気づく佳介。

佳介 「あれ？ハハハ……もう良いのか……」

順次 「お前はワザとか……」

佳介 「分かってたよ、分かってたって！そんな冷たい目をしなさんなって」

裕美 「あたし……別れようかな……」

佳介 「（芝居がかった）ええ！捨てないで！お願い！あたしはもう、あなたなしでは生きられないの！？お願い！捨てちゃいやよ！……」

3人とも、佳介を無視している。

裕美 「ねえ、ちよつと見に行ってみない」

順次 「そうだな。行ってみっか」

真琴 「そうね」

教会の中に向かう3人。  
まだ続きを演じている佳介。

佳介 「いや、ダメよ！そんなこと、お止めください、お代官様……ああれ〜クルクルク  
ルクル〜〜（誰もいないことに気づく）あれ？ちよつと……なんだよ！俺も行  
くよ！」

みんなの後を追う佳介。  
空を見上げる。

佳介 「いい天気だなあ〜」

暗転

3

☆教会内。  
天井も高く広々として高級感を感じる。

人影もなく静まり返っている。  
教会内に入ってくる順次、真琴、裕美。

裕美 「誰もいないね」

やや遅れて、佳介も入ってくる。

佳介 「行くなら声かけてよ」

裕美 「かけたくなかった」

佳介 「ハハハ……」

真琴 「どこ行っちゃったんだろ？」

順次 「おい！健太！美樹！」

健太の声 「おう！ちよっと待って！」

ややあつて、健太が奥から出てくる。

健太 「わりい、わりい！」

佳介 「遅いけど、どうした？」

健太 「いや、なかなか準備が……」

佳介 「準備？なんの？」

健太 「美樹が……」

真琴 「美樹、なんかあった？」

健太 「いやさあ、さっき泣き過ぎてボロボロになっちゃったから、化粧直しするって直してんだけど……なんせ時間がかかってさ……」

裕美 「アラララ……やっぱり！……（呼びかける）美樹！早くしなさいよ！もういくら時間かけたって変わらんないんだから」

美樹の声 「失礼ね裕美！お色直しみたいなのもんよ！一生に一度なのよ！この気持ち分かるでしょ！？」

裕美 「はいはい」

健太 「さつきから、あればっかりだよ。一生に一度、一生に一度って、もう二、三回あるかもしれないのになあ？」

美樹の声 「健太くん！それはどういう意味かしら！浮気する気、満々なねえ？」

順次が悪戯に健太の真似をして返事する。

順次 「そんなことないよハニー！！僕には君しか見えないよハニー！！」

美樹の声 「あら！良いこと言うじゃない順蔵！」

順次 「バレれてたか」

佳介 「バレバレだよ！」

健太 「俺は、ほら、『英雄、色を好む』って言うように……（ノリよく）昔の人は良いこと言ったもんだねえ」

順次 「そうね。やはり英雄というのは、周りがほっとかないというか、女性のほうから寄ってくるというか、一言で言うと、ほっとかんでしょ！この、俺たちを！みたいな」

真琴 「あんたは誰にも構ってもらってないでしょ」

順次 「あらッ！結構、きついことを平気でおっしゃいますのね」

健太 「その点、俺はこう見えても、引く手あまたって言うの！」

裕美 「いいのお、そんなこと言って！」

美樹の声 「健太くん。わたくしと一生を添い遂げる気ないのかしら？」

健太 「とおんでもない！なぐにを仰います、姫！」

美樹の声 「健太くん！保冷剤ぬるくなったからもういらないんだけど！」

健太 「はいはい！ただいま……」

佳介 「！保冷剤！？」

健太 「みんなに泣き腫らした顔見せられないとか何とか言って、（顔の上に）乗っけてんのよ」

美樹の声 「健太！」

健太 「（機嫌を取るように）はいはい！」

美樹のいる部屋に戻って行く健太。

順次 「泣き腫らしてなくても、腫れぼったいにな」

美樹の声 「聞こえてるわよ！順蔵！！」

順次 「すいませ〜ん！綺麗な花嫁さんで〜す！」

美樹の声 「よ〜し！」

裕美 「もういいから。早く来なさいよ」

真琴 「ここで、フラワーシャワーやっちゃうわよ」

佳介 「でも、またフラワーシャワーでボロボロになっちゃうんじゃないの？」

順次 「言えてる」

裕美 「し〜」

化粧直しを済ませ、健太にエスコートされて出てくる美樹。  
しかし、装いはアロハシャツ。

美樹 「（気取って）お待たへ〜！みなさ〜ん！お待たへして、ごめん！あそわせ〜！！」

順次 「……誰だ、あいつ……？」

美樹 「あら！？順蔵君、何かしら！？」

順次

「おまえのなあ、『おまたへ〜!』のところが『(ニッソーの真似をするように)背負い投げ〜!』の人になってたよ。あのなあ、そんな気取ったって、アロハシャツだよ!俺らもみんな!」

真琴

「女の夢を壊すようなこと言わないの」

裕美

「いま、気分は超セレブなんだから」

順次、佳介、こらえつつも噴き出す。

佳介

「もうさ、早いとこフラワーシャワーやろうよ」

裕美

「よし!じゃあ、もう一度外に出るからちよっと待っててよ」

美樹

「了解!」

外に向かおうとする、順次、真琴、佳介、裕美。

健太

「あ、ちよっと待って……これ返してくるから」

ポケットから保冷剤を出す健太。

一つ、二つ、三つと別々のポケットから次々と出てくる。

啞然とする順次、真琴、佳介、裕美。

保冷剤を奥の部屋に返しに行く健太。

裕美 「あんた、どんだけ腫れてたの……？」  
美樹 「大して腫れてないわよ。ハハハ……」

健太が戻ってくる。

健太 「お待たせ。じゃあ、外でスタンバっててよ。一分後にスタートするから」

健太が美樹の元に戻ろうとしたその瞬間、突然激しい爆発音と共に真っ暗になる。  
教会内のあちこちが崩れ落ちる音。

暗転

4

☆教会内。

静まりかえっている。

暗闇と埃で視界が悪い。壁のあちこちが崩れ落ちている。

天井も崩れかけているところもある。

騒然としていて、出口がどちらかわからない状態である。

部屋の真ん中に大きな十字架が倒れて、部屋が二つに分断されている。

片側には順次、真琴、裕美、佳介、健太が倒れ、瓦礫が散乱している。

反対側では美樹がオルガンの下敷きになって気を失っている。

しばらくして順次が気がつく。

起き上がるが、足を怪我したらしく、引きずっている。

周りの様子を見て、真琴に気づき助け起こす。

順次 「真琴！真琴！」

気がつく真琴。

真琴 「あ……順次……」

順次 「大丈夫か……」

真琴 「……うん……痛ッ！」

順次 「どうした？」

真琴 「腕が……」  
順次 「腕？折れたか？」  
真琴 「わかんないけど……」  
順次 「どれ、見せてみる」  
真琴 「うん……」

順次に腕を見せる真琴。

真琴の腕を見ながら、軽く押したり、そうっと伸ばしたり曲げたりしてみる。  
真琴の顔が苦痛にゆがむ。

順次 「痛むか？」  
真琴 「うん……少し……」  
順次 「折れてなさそうだけど、ヒビいつてるかもな……動かさないほうがいいな」  
真琴 「ねえ、みんなは？」

辺りの様子をうかがい、佳介に気づき瓦礫をどけ、助け起こす順次。

順次 「佳介！？……大丈夫か？」  
佳介 「……うん。何とか……裕美は？」

順次 「いや、まだ……」  
佳介 「裕美！裕美！」

裕美が気づき、起き上がる。

裕美 「ここ……」

ふらつきながらも駆け寄る佳介。

佳介 「裕美！大丈夫か？」

裕美 「……うん……でも、足が痛い」

佳介 「足？……」

裕美 「うん……」

佳介 「どれ？」

裕美の足の様子を見る佳介。

裕美 「血？」

佳介 「え？」

裕美 「血が出てる」

と、佳介の頭から血が流れていることを気遣う裕美。

佳介 「俺は大丈夫だって。たいした事ないから」

順次 「裕美は大丈夫か？」

佳介 「うん……真琴はどう？」

真琴 「腕がちよっと痛むけど大丈夫。裕美、大丈夫？」

裕美 「うん……健太達は？健太！健太！」

健太が気がつく。

真琴 「健太！」

佳介 「大丈夫か？」

健太 「ああ、みんなは？」

健太も、足や腕に傷を負っている。

佳介 「多少の怪我はしてるけど、一応、大丈夫」

健太 「……美樹は！？」

順次 「さあ……」

健太 「美樹！美樹！」

返事がない。

真琴 「健太のどこから見える？」

健太 「いや、見えない」

裕美 「大丈夫かな？美樹！！」

それぞれが思い思いに声をかける。

全員 「美樹！」

気づく美樹。

美樹 「健太！みんな！」

健太 「大丈夫か？」

美樹 「ダメ！」

健太 「どうした？」

美樹 「足の上に……オルガンの下敷きになっちゃって動けないの」

健太 「くそ！！」

美樹 「健太、どうしよう？」

健太 「待ってろ、必ず助けてやるからな」

美樹 「うん」

周りの瓦礫をどかし、美樹の方へ行こうと試みる、健太。

手伝う、順次、佳介。

十字架を動かそうと試みる。

順次 「美樹！下敷きなってる足は、両足か？」

美樹 「ううん、片足！下敷きになっただけというよりは挟まっている感じ！」

佳介 「美樹、反対の足でオルガンを押せないかな？」

美樹 「やってみる」

オルガンを押す美樹。

裕美 「どうお！？」

美樹 「ダメみたい。それに体勢が悪くて力入らないし」  
真琴 「美樹、慌てちゃダメよ。落ち着いて。必ず助かる方法はあるから」  
美樹 「うん、分かってる」  
健太 「ダメだ。この十字架ぜんぜん動かない。美樹！大丈夫か？痛くないか？」  
美樹 「大丈夫。痛くないよ」  
真琴 「……ねえ、とにかく一旦みんな落ち着こう」  
美樹 「そうよ。落ち着いて整理しましょ」  
健太 「うん……」  
佳介 「（辺りを見ながら）なあ、いったい今何があったんだ？」  
順次 「こりゃ、ひでえなあ……」  
裕美 「なんか突然爆発したみたいだったよね」  
健太 「うん……」  
美樹 「テロ？」  
裕美 「まさか……ここはハワイよ」  
順次 「ハワイでテロは起こらないって、言い切れないよ」  
裕美 「でも……」  
佳介 「いまは、あちこち警戒中だし、ハワイで起こってもおかしくないよ」  
裕美 「……そうね……」  
佳介 「俺たち、ここから出られるのかな？結構、すごいことになってるみたいだし」

裕美 「ねえ、ここからどうやって出るの？」

佳介 「そうだな……」

真琴 「助けに来てくれるのを待つしかないんじゃない？」

健太 「この教会だけに爆弾が仕掛けられてたんだとしたら、助けがすぐ来るんじゃないか？」

裕美 「もし、テロだったら、外はいつたいどうなってるの？」

美樹 「ちよっと！あんたたち！あたしを助けることは忘れてないでしょうね」

健太 「(忘れたことを誤魔化すように) もちろんだよ」

順次 「まだ、それだけ減らず口がたたけるなら大丈夫そうだな」

真琴 「そうね」

外のほうで、爆発音が聞こえる。  
全員がビクツと身を縮める。

美樹 「今の……爆発音だよね？」

順次 「そうみたい……」

真琴 「外も、大変なことになってるのかも……」

順次 「もしそうなら、助けがいつ来るかも分からないし、とにかく、自分たちで出来る限りのことをしよう」

健太 「そうだな」

真琴 「じゃあ、もう一度みんなの状況を確認するわよ。あたしは腕を動かそうとするとちよつと痛むぐらい……裕美の怪我はどう？」

裕美 「あたしは足が痛いけど、あとは大丈夫」

真琴 「うん。佳介は？」

佳介 「俺は頭を打ったみたいだけど、今のところはなんともない」

真琴 「分かった。順次も足ね」

順次 「そういうこと」

真琴 「健太は？」

健太 「俺は、腕と足だけど、どっちかというと、足のほうが痛むかな」

美樹 「健太そんなに怪我してるの？大丈夫？」

健太 「ああ、大丈夫だよ。かすり傷だから」

真琴 「美樹は足が挟まれてるみたいだけど、他にはどっか痛いところある？」

美樹 「とりあえず、他は大丈夫」

真琴 「よし。みんなの状況は分かった。じゃあ、まずは出口を見つけなきゃね」

健太 「俺は、美樹の方に行けるように、この辺を何とかしてみよう」

真琴 「そうね。じゃあ、それお願い。健太ひとりだと大変だから、順次も健太を手伝ってあげて」

順次 「よし」

健太 「ここは、俺ひとりで大丈夫だから、順次はそっちを手伝ってやってくれよ」  
順次 「そうか？大丈夫かひとりで？」  
健太 「ああ。美樹を助け出せても、出口がなきゃ外に出れないし、美樹も痛がってないから大丈夫だよ」  
順次 「そうか。分かった」  
佳介 「よし、じゃ行こう」

それぞれが移動する。

暗転

5

☆同じ場所。数十分後。

健太 「見えた！（みんなに）美樹が見えたぞ！美樹！見えるかここだぞ！」  
美樹 「見えるよ健太。やっと会えたね」  
健太 「お待たせしました」

美樹 「うん」

みんなが近くに寄ってきて、交代に覗く。

順次 「どれ？……よっ！久しぶり！」

美樹 「順蔵！遅いんじゃないの、作業が！」

順次 「これでも頑張ってるんですけどねえ」

美樹 「ありがと」

順次 「いいってことよ！（健太に）おい、これ……手え伸ばすと美樹に届くんじゃないか？（手を入れる）ほれ！美樹、手伸ばしてみ」

美樹 「あ、ちよっと、ヤダもう順蔵！変なとこ触らないでよお」

順次 「あっ、バカ！これはお前の手だろ！誤解されるようなこと言うな！」

と、健太を見る。健太が疑りぶかそうな眼で順次を見ている。

裕美 「あららく、順次君、どさくさにまぎれてやっちゃった？」

順次 「なに言ってんだよ！俺は健太に、美樹に触れられるということを教えようと。そうすればお互いに少しでも安心できるかと思って……」

真琴 「大丈夫よ。そんなことはみんな分かってたんだから。あんただけよ動揺してるのは」

順次

「バ・カ！（明らかに動揺して）俺は別に動揺なんて……ごくごく普通ですよ。まあ、ある意味冷静だったといっても過言ではない。なんか一瞬フワっとした感覚があったような気もしたが……いやいや、あれが手だということはすぐに分かった」

裕美

「もういいから、そこどきなさいよ」

と、順次を横にいなす。

順次

「あ、いて」

健太の前に転がり出る順次。

健太

「やあ！」

順次

「いや、俺はね……確かに手には触れたよ。でもね、それは手であって……それよりも届くということをお前にね……」

健太に一生懸命、誤解だということを説明し続けている順次。

裕美

「（覗く）あら、美樹さん。お元気そうじゃない」

美樹 「そういう裕美さんこそお元気そうで何よりですわ」

微笑を交わす美樹、裕美。

裕美、怪我してないほうの腕を伸ばし、美樹と握手する。  
佳介と交代する裕美。

佳介 「大丈夫か？」

美樹 「もちろんよ！頭、大丈夫？」

佳介 「平気平気！」

佳介と真琴が交代する。

真琴 「良かったね。もう少しの辛抱だからね」

美樹 「ありがと、真琴」

真琴 「なに言ってるのよ。まだ出られたわけじゃないんだから」

シラゝとした顔で順次の言い訳を聞きながらも、真琴の言ったことに反応して、順次を横にいなす健太。

健太 「そうだよ」

順次 「(いなされて) あら、また」

健太 「まだ一步前進しただけだよ」

順次 「(偉そうに) 健太君！一步でも前進しなきゃ、二歩目はないのよ。その為には、目の前にあることと向き合う。そして、まず一步踏む出すことが大事なんだ。そうすれば自ずと二歩目が出て、気がついたときには先が見えてくるもんだがやねえ」

裕美 「良い事言うじゃない、順蔵！でもその、だがやねえ、てのは何？」

順次 「別に、何でもござらん」

みんな、順次の事を無視している。

佳介 「(美樹に) 出口らしいここは見つけたんだけど、やっぱり瓦礫が多いから、もうち

よっと待ってて」

美樹 「分かった」

真琴 「じゃあ、出口の方も、もうひと踏ん張りしよう」

裕美 「うん」

順次 「おうく！」

順次の変なハイテンションに、みんなの冷たい視線。

健太 「美樹、もう少し待ってて。今度はあっち手伝ってくるから」  
美樹 「分かった。頑張ってるね」  
健太 「ああ」

みんなに近づく健太。

真琴 「健太は、美樹の傍についてあげて」  
健太 「でも、手数が多いほうが作業も早くなるだろ」  
裕美 「大丈夫よ。ハイテンション男がいるし……（順次に）ねっ」

順次が返事する前に、佳介が順次の真似して返事をする。

佳介 「おう！」  
裕美 「美樹、動けないんだから、こんな時に一人で待ってるほうが不安なもんよ」  
健太 「分かるけど……」  
順次 「まだまだ女心を分かってないな健太君。つめが甘いぞ」  
佳介 「いてやれよ。必要な時は呼ぶからさ」  
健太 「ありがとう」

みんな、作業に行く。  
健太、美樹の方の戻る。

健太 「美樹」

美樹 「どうしたの？手伝わなくていいの？」

健太 「みんなが、美樹のそばにいてやれって」

美樹 「……みんな優しいね」

健太 「そうだな」

美樹 「ねえ、健太……」

健太 「ん？……どうした？痛むか」

美樹 「ううん、違うの……あたしのせいで、みんなを巻き込んだみたいで……」

健太 「何が？」

美樹 「あたしが急に式挙げたいなんて言ったから」

健太 「何言ってるんだよ。あたしたちが、だろ？」

美樹 「でも式挙げたかって言ったのはあたしだし」

健太 「俺だって挙げたかったよ」

美樹 「ほんと？」

健太 「ああ」  
美樹 「ほんとにほんと？」  
健太 「ほんとにほんとだよ。陽平ができちゃったから式挙げてなかったしな。でも、ほんとうは……」  
美樹 「何？」  
健太 「ん？なんでもないよ」  
美樹 「何よ？」  
健太 「なんでもないいったら」  
美樹 「何？やっぱり、やだったんだ？」  
健太 「違うよ。本当は、こんなカッコじゃなくて、ウエディングドレスを着せてやりたかったなあと……ちよっと思っただけさ」  
美樹 「健太」  
健太 「ん？」  
美樹 「ちよっとなの？」  
健太 「え？」  
美樹 「沢山じゃないの？」  
健太 「何が？」  
美樹 「ウエディングドレス。ちよっと思わなかったの？」  
健太 「ああ！沢山思いました」

美樹 「思いました?……『ました』なの?」

健太 「え?」

美樹 「『ます』でしょ。思います」

健太 「そんなことどっちでもいいんじゃないの?」

美樹 「そんなこと?……健太くん。これは大切なことなの。『ました』は過去形だけど、『ます』は進行形でしょ。大切なことは過去じゃなくて現在なのよ」

健太 「なるほど。了解!」

美樹 「よろしい!では、帰ったらレンタルで借りて着てあげます!」

健太 「なんだよ、美樹だって着たいんじゃない」

美樹 「そりゃそうよ。ウエディングドレスは女子の憧れだもん」

健太 「そうか!よし!じゃあ帰ったら着せてやるからな!」

美樹 「うん!」

健太 「だから、美樹一人のせいじゃなくて、俺たちだろ」

美樹 「そうだね!ありがとう」

健太 「うん」

美樹 「健太」

健太 「ん?」

美樹 「……天井……沢山ヒビが入ってるみたいよ」

健太 「そりゃ、あの爆発だったんだ、ヒビぐらい入るだろ」  
美樹 「大丈夫かな、ここ……心配になってきたよ」  
健太 「大丈夫だよ。俺がついてるんだから」  
美樹 「うん。でも……」

順次たちの声が聞こえる。  
順次たちが戻ってくる。

順次 「お待たせしました〜！」  
佳介 「少し小さいけど出口までの道が開いたよ」  
裕美 「もう大丈夫。助かるわよ」  
真琴 「美樹、もう少しの辛抱で出れるからね」  
美樹 「うん……（元気がない）」  
真琴 「どうしたの？大丈夫？」  
健太 「大丈夫なんだけ……あっちこっちにヒビが入ってヤバそうかなって……」

それぞれが天井や壁を見上げる。

順次 「……なるほど……確かに……」

佳介 「ほんとだ。早くしないとヤバイね」

真琴 「じゃあ、急いで助けを呼びに行きましょう」

佳介 「うん」

真琴 「誰が行く？」

裕美 「みんなで行くのが一番いいんだろうけど、美樹一人にしておけないし」

健太 「俺がここに残るから、みんなで行ってくれよ」

順次 「それよか、足が動くやつが行ったほうが速いんじゃないか」

裕美 「それなら、真琴と佳介かな……佳介、頭、大丈夫？」

佳介 「うん、大丈夫」

美樹 「待って！」

全員 「？」

健太 「どした？」

美樹 「みんなで行って」

順次 「みんなって、美樹を残して行くわけにはいかないだろ」

美樹 「ううん、あたしは大丈夫だから。それよか、まだ外の様子もわかんないんだし、み

んなで出て行ったほうが、もし助けがいなかった時にそれぞれが動いて探せるで

しょ。助けがすぐいれば、足の大丈夫な真琴か佳介が呼びに走ってくれば早い

し……それに……その時にはみんなもう外には出てるわけだから、ここにいるよ

りも安全だし」

裕美 「でも、美樹だけ置いてはいけないわよ」

健太 「いや、俺が残るから。みんなは美樹の言うように行ってくれ」

美樹 「健太もみんなと一緒に行って」

健太 「何言ってるんだよ、俺はここに……」

美樹 「お願い！『もしも』ってことがあるでしょ」

健太 「なんだよ、『もしも』って」

美樹 「もしも、ここが崩れて……」

健太 「そんなことあるわけないだろ！」

美樹 「だから、『もしも』よ。もしもそうになって、ふた親ともいなくなったら……陽平が

寂しがるから……」

真琴 「ちよっと！そんな縁起でもないこと言わないでよ」

裕美 「そうよ。出る時はみんなで行こうよ」

美樹 「いいから！……あたしは大丈夫だから……だって……みんなをこんな目に合わせ

ちゃったのも……元はといえ、あたしが……形だけでもいいから、式やりたい  
って言ったせいだし……」

順次 「何言ってるんだよ。それとこれとは関係ないだろ」

美樹 「関係あるよ……ほんとなら、今頃日本に着いてたかもしれないし……だから、お  
願い！（笑顔で）その代わり、必ず助けに来て！」

真琴 「……」

順次 「……」  
 裕美 「……」  
 佳介 「……」  
 健太 「……分かった。みんな、そうしよう！」  
 真琴 「！」  
 順次 「！」  
 裕美 「！」  
 佳介 「！……健太」  
 健太 「だって、このままじゃラチがあかないだろ。こんなことしてる時間があるなら、動いたほうが早いんじゃないか」  
 順次 「……分かった。そうしよう。なっ！みんなとにかく早く動こう」  
 真琴 「分かった。そうね」  
 裕美 「うん。美樹、すぐ戻ってくるから待っててね」  
 美樹 「うん。待ってる」  
 佳介 「急ぐからね」  
 美樹 「うん」  
 順次 「ちよっと、寂しいだろうが、今しばらくのご辛抱を！！」  
 美樹 「早くせいよ、順蔵！」  
 順次 「御意に！」

真琴 「あたしは足は無事だから任せといて！」  
美樹 「真琴は足遅いからなあ」  
真琴 「今日は大丈夫よ！超特急だから！」  
美樹 「新幹線並みに頼むわよ」  
真琴 「うん」  
健太 「じゃあ、行ってくる」  
美樹 「うん！」  
健太 「行こう！」

6

☆同じ場所。

美樹が一人うなだれている。

健太が戻ってくる。途中、落ちているフラワーシャワーのカゴを拾う。

健太 「美樹……」

暗転

美樹 「健太！どうしたの？」

健太 「どうしたのって、戻ってきたんだよ。美樹ひとりにさせられないだろ」

美樹 「……みんなは？」

健太 「行ってもらった……」

美樹 「……良かった」

健太 「そのうち戻ってくるよ」

美樹 「そうだね……健太……」

健太 「ん？」

美樹 「……あたし、怖いよ……ほんとに助かるのかな」

健太 「大丈夫、助かるよ」

美樹に手を差し伸べる健太。  
その手を握る美樹。

美樹 「うん……」

健太 「俺がついてるよ」

美樹 「ありがとう……」

健太 「結局、俺たちは何しに来たんだろ……」

美樹 「え……？」

健太

「俺たちは……こんな目に遭うためにここに来たんじゃない」

美樹

「そうだね……ここ崩れちゃったら、もう陽平にも会えなくなるよ。ちゃんと育てくれるかな……」

健太

「そんな心配しなくてもちゃんと出れるから大丈夫だよ。俺たちは幸せになるためにここに来たんだから」

美樹

「うん」

健太

「まあ、親はなくとも子は育つっていうけどな」

美樹

「そうか……そうだよな」

健太

「まあな。でも大丈夫だからね」

美樹

「うん……ねえ、あたしと一緒にここにいていいの？」

健太

「当たり前だろ」

美樹

「だって崩れるかもしれないだよ……」

健太

「崩れないよ。それに……俺たちはこんなところで死ぬために生まれてきたんじゃないだろ」

美樹

「（一生懸命、頷いている）」

健太

「神父さんも言ってたろ。『（神父風に）死が二人を別つまで。あゝ、病めるときも、

健やかなるときも、愛を持って生涯支えあう事を誓いますか？』って聞かれて、俺は『はい。誓います』って誓ったんだよ……だから、ずっとどこまでも美樹と一緒に……陽平は実家のお父さんたちが見てくれるけど、美樹のことは俺が見てや

「んなきやダメだろ……」

美樹 「うん……」

健太 「だからもし……万が一ここが崩れるようことがあったとしても……それが運命だったとしても……俺はずっと美樹といるから」

美樹 「……運命……?」

健太 「そう。そういう運命なら受け入れるしかない」

美樹 「……うん、ありがとう……（うなだれる）」

美樹の頭の上から、フラワーシャワーの花びらがこぼれ落ちてくる。

美樹 「!？」

健太がかけている。

健太 「……また泣いてると、せっかくの綺麗な花嫁さんが台無しだぞ」

美樹 「……ありがとう！」

(時間経過)

真琴、順次、裕美、佳介が教会の外に出てくる。

順次 「くそ、やっと出れたぜ。思ったより手間取ったな」  
佳介 「うん。急ごう」

音を立てて崩れる教会。  
振り返る真琴、順次、裕美、佳介。

真琴 「！」  
順次 「！」  
裕美 「！」  
佳介 「！」

7

☆天界。―場と同じ場所。

暗転

美樹 「あたし達は、とっても幸せだったのよ。悪いことなんてしてないのに、なのにな

んであんなところでテロに……」

健太 「あの時、俺たちはああなる運命だったんですよ。そう思うしかない……そう思っ  
て自分を納得させるしかないんです」

神様 「君らの代わりに、今回生まれ変わらせる天使を呼び出し、その天使に、生まれ変  
わるかという意味を確認してほしい。そして、その結果を私に報告するように」

健太 「はい……」

神様 「(指し示し)ここを歩いていくと光の穴がある。その中を進むと、迷界に出る。そ  
こで新たな天使と出会うことになるであろう。頼むぞ」

美樹 「はい……」

神様 「では、行くが良い」

健太と美樹が歩き出す。

神様 「君らにはまだ気がついてないことがある。運命というものは決められているかも  
しれん。しかし、それを良いようにも悪いようにも変えるために、人生というも  
のがある。人生は変えられる。人生は運命に逆らっても、切り開いていくもの  
だ。自分の人生は誰かに左右されるものではない。自分自身で作り上げていくも

のなのだ。あの日……君らの運命はテロによってねじ曲げられてしまったのだ……人はいかなる時も、生きること、人生というものをあきらめてはいけない。それは、生まれ変わるかを決める時でもある。まだ見ぬ未来を卑下したり諦めてはいけない。未来には希望がある。そのために人は……生まれ変わるものなのだ。……君らはまだそれに気がついていない。だからこそ、その使命を与えたのだ。それに気づいてもらうために……もう一度、人生というものを見てくるが良い」

健太と美樹が現れる。

光の穴を探している。

ややあって、光の穴らしきものに気づく。

美樹  
健太

「?……ねえ、あれじゃない?」

「みたいね」

と、穴に近づき覗き込む健太。

その瞬間、穴に落ちそうになり、とっさに美樹を掴む。

健太  
美樹

「うわー!何?あら!なんだよ!」

「うわッ!ちよっと引っ張らないでよ!」

落ちていく二人。健太・美樹の悲鳴。  
微笑んでいる神様。

幕